

社寺建築及臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候
(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不)充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の特大特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理整然木
- 六、木高輝色

統一價定	
一冊	金貳拾錢
半冊	金壹貳拾錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共
送料五厘	送料五厘
金前	金前

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾圓
半頁	金五圓
四分一頁	金九圓
一頁	金五圓
金前	金前
事之	事之

大正十五年 七月三十日印刷納本(第三百七十七號)
大正十五年 八月一日發行

不許複製

編輯所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地
印刷所 三益社

編輯所 名古屋市中區田代町字城山七十七番地
發行所 統一發行所
編輯局 統一編輯局

目 次

聖訓摘要	本多日生
法華修業の安心	本多日生
社會問題と佛教	石田三次郎
讀書錄	不明
各地通信報導	編輯局

第三十三號 九月



統 一

教

第八號出づ

本誌執筆家

- 本多日生
- 後藤新平
- 床次竹二郎
- 永井米藏
- 岩野直英
- 高島平三郎
- 志賀重昂
- 佐藤鐵太郎

その堂々たる内容
各方面の名家執筆

毎月一日 十一日發行 一部金十錢

東京荏原郡品川町南品川四二二

發行所 教發行所

(振替東京一〇九四〇番)

蓄音機

大僧正本多日生師吹込

- 一、宗教信仰の必要
- 一、佛教信仰の歸結
- 一、佛教の卓越せる所以
- 一、聖語

二枚四組二圓四十錢(多二送料三十錢)

東京市淺草區北清島町一四

取次所 統閣

本多日生猊下著小冊子

(現在品のみで、再切れ絶版になつたものは、注文さるゝと餘計な手数で困ります)

- 自我 偈 講 義 一部金廿錢送料金貳錢
- 修法勸行の心得 一部金十五錢送料共
- 一切の勝利は人格にあり 一部金五錢送料共
- 宗教の五綱 一部金拾五錢送料共
- 教育勸語と思想問題 一部金貳拾錢送料共

名古屋市東區田代町城山

編輯局

振替名古屋一〇八一九

多数購讀の節は特別割引御照會下さい

聖訓摘要

(第五)

大僧正 本多日生

安國論御勸由來

これは安國論をお作りになつた精神を簡單にお書きになつた御文章でありまして、この中には特に記憶すべき大事な點があります。それは

(御遺文 六〇六)

若し此の國土を毀り壞らば、復佛法の破滅疑ひ無き者なり。といふことをお書きになつて居る。即ち日本の國が減びてしまへば佛法も減びてしまふといふことを仰しやつた、普通の考は國は減びても宗教は減びるものでない、印度は減びたけれども佛教は残つて居るぢやないかといふことを多く言ふのであります。所が日蓮聖人はその反對に、日本の國が減びたならば佛法も減びてしまふと仰しやつて、茲に愛國の精神を發揮せられて居るのであります。この意味を正しく了解しなければならぬと思ふ。一通りの宗教は國が減びても別に残つて行くではありませんが、完全な最も理想的なる宗教はさう簡單なものではないのであつて、全くその國の文化が十分に完成をして、その國のあらゆる力と協力を始めてその宗教が進んで行くものであると思ふのであります。それは野生的宗教と言ひますが、人間の心から唯だフラ／＼湧いて出る所の宗教、例へば大本教のやうな天理教のやう

なあゝいふものは、ナンボ放擲つて置いて生へます、恰かも雑草の如きものでありますから、百姓が居なくとも草は生へるぢやないかといふことになるけれども、上等な菊であるとか牡丹であるとかいふ非常な立派な物は、それ／＼の花作りが居らなければ決して十分に發育するものではない。そのやうに野生的な文化は國が滅びても傳はつて行くけれども、最も完全なる道徳とか宗教とか精神の文化といふものは、その國力の全体を擧げて之れを擁護し發達せしめて、さうして尙ほ且つその力の及ばざることを憂ふる位のものである、恰も花作りが花を作るのに非常に熱心に努力してさへも、尙ほ且つ力が足らぬ位に思ふのである、それを何日も／＼水も與らず草も探らず、放擲らかして置いてもナンボでも生へますといふやうな物は、決して立派な植物ではない。それ故に嚴密に佛教を考へて見るといふと、天竺にも支那にも釋尊の出世本懐と言ひますか、釋迦如來の眞實をお弘めになつた佛教は、十分に發達をして居らぬのである、印度に於て釋迦滅後迦葉、阿難、龍樹、天親等が出たけれども、孰れも小乘、權大乘の教を弘めて、法華經の教を弘めた人が殆ど無い、纔かに法華經を開いた人もあるけれども、法華經の眞の精神を發揮した者は居らぬ位のことである、支那に來ても澤山の佛教徒があつたけれども、法華經の眞髓を誰が發揮したか、天台、妙樂に依つて法華經の蓮門の法華三昧の意味は唱導せられたけれども、日蓮が唱ふるが如き本門の大事な所は發揚されて居らぬ。日本に來てもさうである、澤山の宗旨があるからと言つても、或は般若心經に依り阿彌陀經に依るといふやうな宗旨は成程ある、それは日本の國が滅びても左様な雜然たるものは佛教として残つて行くだらうけれども、日蓮が理想したる所謂法華經の最も尊い三大秘法の教としては、これは日本の國家が隆盛であつて、教は國を扶け國は教を助けて法國協力して進んで行かない限りには、

この偉大なる教は弘まるものでない。それ故に國が滅びてもその宗教は残るといふやうなものは、低級なる野生的の宗教である、國が滅びてもその文化は残つて居るといふやうな文化は、極く低級なる文化である、偉大なる文化は必ずやその國家の隆盛と共にその精神文化も發達をして行くのであります。靈西亞の國が滅びてしまへば靈西亞の精神文化がやはり滅びてしまふのである。さういふ譯で日蓮聖人は國が滅びても教は残るといふやうな普通の考を否定して、飽くまでも國家の發達と伴ふて理想的の宗教が榮えて行くことを信じて居るから、それ故にこの日本の國が滅びたならば佛教も滅びてしまふことを考へて、『立正安國論』を書いたのだと言はれて居る。

さうすると安國論の精神は飽くまでも國家の觀念を本にして教を觀られたので、安國論にある「先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし」といふことは安國論を貫いて居る大精神と見なければならぬ。教を重んずることは無論であるけれども、教さへあれば國は滅びても宜いといふ考は、日蓮は毛頭之れを許さんのである、飽くまでも國の隆盛と並んで佛法の擁護を考へた、それが安國論の精神になつて居る。そのことは唯今の遺訓が明かにそれを示して居るので、この國土が毀壞たならば佛法の破滅も疑ひ無いものであると言はれて居る。日本と獨逸が戦つて假に日本が敗れたとしたならば、さうして獨逸の勢力が普及して來たとしたならば、さうしても日本の精神文化といふものは同時に破れてしまつて、日本で尊んだ舊來の道徳、宗教、精神の文化といふものは段々衰へて、獨逸式の道徳、宗教、精神の文化といふものが盛んになつて來なければならぬ。その國が衰へても宗教だけそつくり残るといふ譯はない、殊に日蓮主義のやうな日本の色彩を帯びて居る——一方から言へば世界的宗教である、絕對眞理の宗教であるけれども、最も

日本の國體と調和して現はれたる日蓮の主張は、日本の國が滅びたらやはり世界何れの所にもその立場を失ふものであると日蓮聖人は考へて居る。その代りに日本の國はさうしても滅びさせない、日は東より出でて西を照すが如くに、必ず日本の國は益々その國力を發展し、さうして外に日本の光を現はすやうになつて行く、日は世界のあり限り光を失ふものではない、日本はその通り太陽と光を同うして、世界の最後の文明を支配するものである、その時まで日蓮の教は榮えて行くものぢやといふことを信じて居つたのであるから、若し日本の國が滅びたら、「國は滅びても少し焼き直して日蓮主義を支那に持つて行つてやらう」といふやうな微温いことは考へない方が宜い、日本の國が滅びるならば日蓮主義は一緒に滅びて終はんといふことを考へて置くのが日蓮聖人の御精神であると私は考へる。それは又變つた意味の教が法華經の中から芽を吹くかも知らん、日本が滅びてしまひ日蓮主義が滅びても佛教は残つて、法華經の意味も他の意味から解釋したものが人類の何處かに芽を吹くかも知らんけれども、それは日蓮聖人の唱導した法華經主義ではなくして、他の異なるものであると考へなければなるまいと思ふ。日蓮主義は非常に國に對する親しい關係を有つて居るので、マア日本の國が潰れるならば一緒に心中しやうと考へて居る宗旨であるといふことを明かにして置けば宜からうと思ふ。今は無闇に廣い事を考へたり、或は個人の事を考へたりすることが現代思潮のやうに思つて居るけれども、最後はやはり理想的の國家を結ばなければ、廣い世界の文明も完成が出来ず、又一人々々の幸福も無い、理想的の國家と協力的の教と協力して、さうして最後の文明が造り成されるといふことを日蓮主義は信じて居るものであります、この點には一點惑ふ所があつてはならぬと私は考へます。

興北條時宗書

次は所謂「十一通御書」と申して、宿屋入道、北條時宗、宿屋光則、頼綱、道隆、良親、大佛殿、壽福寺、光明寺、多寶寺、長樂寺等に贈られたお手紙が擧つて居るので、これは全体に通じて今の立正安國の精神から、蒙古の牒狀が來て日本の國が愈々危ないといふことに就いて、當時の執權北條その他有力な人々に對して、日蓮聖人が國家の安危を憂ひて贈られた所の書面でありまして、孰れにも教を正し人心を導いて日本の國に盡さなければならぬといふ大事な事を論明せられたのであります。その中時宗に與へられた御書の中に特に注意すべきは

國家の安危は政道の直否に在り、佛法の邪正是經文の明鏡に依る。(遺文錄)

といふことを論せられた。日本の國の立つ立たぬはやはり政治の上のやり方如何に依るのである、併しその政治といふものは表面の事だけを言ふのではない、日蓮聖人の考へて居る政治の本義は、やはり人心を導いて行く所の今の教育とか宗教とか道徳とかいふことが、政治の中の最も大事なもので、殖産興業とか軍備擴張とかいふことは第二に屬するもので、第一は人心を導く所の文教が最も重いものとして考へられて居る譯である、「政道の直否」といふことはそれを言ふのである。今一つはこの人心を教化して行く所の宗教なり道徳なり精神生活の大事なものは佛教であると日蓮聖人は考へて居るのであつて、それは儒教なり神道なりにあるけれども、もつと能く整つた我が國民の精神生活は佛教に依らなければならぬ。そこで又佛教の正邪を明かにして行かなければならぬので、同じ佛教だからと言つても、貧弱な或は低級な意味

に於て佛教をやつたならば、それだけ日本人の思想といふものは貧弱低級になるのである。佛教を日本の精神生活の部分に置くのではない、日蓮聖人は日本人の精神生活の先づ全体を佛教の思想に於て考へる、儒教なり、神教の教も無論用ひるけれども、大事な精神といふものは佛教に於て導かれなければならぬ、その場合に佛教が貧弱であり低級であつたならば、日本人の思想がそれだけまづぐ出来る譯であるから、佛教の中の方便の教や偏つた教を以つて世の中に弘めるといふことはいかぬ。佛教を唯だ日本の文化の内の隅に押込んで置いて、信つても宜し信らんでも宜いといふことならば、それは何でも宜しいけれども、この佛教を以つて日本の人心を指導する所の最も大事なものとして考へた時には、その佛教の最も善い所を発揮しなければならぬ。これは今の政治家でも日本の相當な人間としては考へんならぬことである、今頃宗教が必要であるとか無いとか、又必要だといへばどんな宗教でも宜いとか、さういふ漠然たることは實に詰らぬことだらうと思ふ。宗教の人生に必要なことは頗る明白なことで、人間の精神生活を營む所の基礎、根本は宗教に依らんければならぬ、それは道德も學術も總べて人間の精神生活の一つである、謡曲をやるのも演藝をやるのも芝居を見るのも皆精神生活の一部分だけれども、そんな謡曲や芝居などはあつても無くても宜い、あれば結構だけれども芝居が人類に無いからと言つて、それが爲にさうといふ事は無い。宗教といふものはそんな謡曲や芝居や素ツ裸の女の繪などとは違つて、さうしても人生に無かるべからざるものである、精神生活の中軸、根柢をなすものである。それを今頃になつて例へば「人間に繪畫があつた方が宜いか無い方が宜いか」とか「人間には文學があつた方が宜いか無い方が宜いか」とか言つたら殆ど問題になるまい、文學といふものは人間にある方が宜い、繪畫も芝居もあつた方が宜いといふこと

になる譯である、それを宗教の必要が今頃判らぬでマゴ／＼するといふやうなことは、實に愚も亦甚しい者である。又宗教が必要だと言へば「マア／＼大本教でも無いより増しぢやらうか」といふやうなことをいふ。併ながら宗教は必要欲くべからざるものであると同時に、誤つたる宗教ほど又恐るべきものはないのである、宗教は傳播性を有つて居るから、個人の安心立命のやうに考へるけれども、それが他を勧めて傳播して行くから、その中に病毒があれば傳染病の如くそれが他に傳播して行くものである、それ故に宗教の必要と同時に之れを撰んで、最も完全なるものを要求するといふ位のこと第一に考へなければならぬ。永い間人類の文化を禍ひしたのは、宗教を撰ぶといふ觀念が不透明である事であつた、日本なども佛教が始つて既に千三百年、今尚ほ佛教の方便と眞實の關係をも考へずに居るやうな人が非常に多い、さうして「さういふ事を言ふのは不利益だ、いろ／＼間違つた考の者も多いのであるから、ごつちへも當り障りのないやうに言つて置く方が都合が宜しい」といふやうな、卑怯といふか屁古垂れといふか別らんやうな頭腦で、一寸物をいふ時分でもハッキリいふと甲の者は悦んでも乙の者は悦ばぬから、ごつちにも都合の好いやうな事をいふ、「それは宗教といふものは前に必要なので……」といふやうな微温いことを言つて何時までも世の中を混沌の狀態に置かんとする者が一パイ居る、尚に卑しむべき精神狀態である。「私は佛教に就いては知識は餘り少ないけれども、君達佛教をするならば佛教というても數多いことで、低い所から高い所まではピンからきりまであるから、ごうか最も良い所を撰んで健全な信仰に入つて呉れよ」位のことを言つたからといつて、何も男が下がるものではなからうぢやないか。ごうしてそんなことが言へないか、親の躰が悪いからぢや。

興建長寺道隆書

それから十一通御書の中に建長寺の道隆に與へられた御文章の中に、
忽ち三徳の釋迦如來を抛ち、而して佗方の佛菩薩を信す、是れ豈逆路伽耶陀の者にあらずや。(遺文錄)
とお書きになつて居る、主師親三徳の釋迦牟尼佛を抛つて、他方の佛菩薩を信するのは逆路迦耶陀といつて師に背き親に背いて行く不孝のやり方であるといふことを仰せられて居る。

問注得意鈔

これは問注所即ち當時の裁判所に嘆び出された時の心得と書かれたもので、當時信者が三人召喚狀を受けて、裁判所に嘆び出された、その時に決して激昂してはならない、粗暴な言葉を使うてはならない、寧ろその機會に於て正々堂々と日蓮の主張を申述べて、さうして役人共に條理を以つて彼を動かすやうにしなければならぬといふ事をお書きになつて居ります。之れを見ても日蓮聖人の運動は決して粗暴な態度を取られたものでない、今日の或る主義者がやるやうに「ツイ、ツイ、言つてやるやうなものではない、その點を日蓮主義者は能く考へて置かなければならぬ。何時か彼の東京焼打事件の時に、日蓮主義者であつたか
なかつたか知らんけれども、「南無妙法蓮華經」の旗を立て、基督教の會堂に火を放つたことがある、そんなことを飛上り者と一緒に日蓮主義者が飛出してやるといふことは非常に間違つたことである、それがこの「問註得意鈔」の中に能く書いてある。日蓮主義は正義を以つて立つ者であるから、そんな暴力などに

訴へてやるべきものではない、日蓮主義の歴史には壓迫を受けたことはあるけれども、此方から焼打に行つたり襲撃に行つたりしたことは六百年の歴史に一度も無いことである。それ故に今日日蓮主義が世の中がガヤ／＼と紛れ込んで、ポーツマス會議に後の騒ぎに「南無妙法蓮華經」の旗を立て、基督教の會堂を焼いたとか、又今後も何かの事情に依つて社會が騷擾がある時に、面白半分題目の旗などを立て、飛出して富豪の邸宅に火を放けるやうな事があつたりしたならば、日蓮聖人に對して非常に申譯の無いことであらうと思ふ。そんな行方をするものでないといふことがこの御文章の中に詳しく書かれて居る、何處までも國民の思想を導き、政治上に於ては政治上の意見を導いて、さうして日本の風教を確立する迄に行つのであるから、今日で言へば議會の覺醒を促し、國民の覺醒を促して國家の輿論を造つて、遂にその目的を達するより外は無からうと思ふ。又或は皇室に於て御自覺になつて爲さる事もあらう、何れにしても正々堂々の論陣を張つて進むのであつて、さういふ粗暴の方法を用ふるものでないといふことを能く心得て置かなければならぬと思ふ。

富木殿御消息

これは極く短かいものでありますが、中に天台大師の大師講のことが書いてあります、これは注意しな
置かなければならぬ。日蓮聖人は天台、傳教以上の法華經本門の教を立てられたけれども、自分の學問の系統が天台、傳教に負ふ所多いが故に、それ以上の教を立て、も最後まで天台大師の御恩を忘れんやうに大切になさつて、身延に入つても大師講といふものを營まれた、身延を開いた時分にも天台大師の御恩を

報せんが爲に法華堂を造ると言はれた位で、餘程師の恩を重んぜられた。又始めの師匠道善坊に對しても、道善坊は主義に於ては違ふけれども、最後までその恩義を忘れぬやうになさつた、さういふ點を見るのにこの文章が餘程宜いと思ふ。日蓮主義の或る人は天台大師などは主義が間違つて居るとか言つて、随分亂暴な字を使つて居るのを見た。「天台は顛大なり」と言つて、天台大師といふのは顛倒の大きなものであるといふやうな事を書いて悪口を言つたりする人があるけれども、さういふ事はいかん。何處までも日蓮聖人は大師講を營んでその師の恩を報せられたこの報恩の道徳、又さういふやうな温かな意味合が寧ろ日蓮主義である。日蓮主義は正義とさういふ温かい精神を以つて堂々と進み行く者を迫害する場合には、これに對抗する所の鞏固なる決心があるけれども、自ら好んで天台の名前と顛倒の大なるものなりといふやうな事は決してしないものである。さういふ異虎憑河の勇氣ではなくして、全く健實なる信の溢れが勇氣となつて居るものである、慈悲の結晶が勇氣となつて居るものである、粗暴とか反抗とかいふ意味から養はれた道徳とは趣きを異にするといふことを十分に打込んで置きたいと考へる。

立正安國論奥書

これは「安國論」に附いて前に出て居る事であつて、別段御紹介する程のこともない。

法門可被申様之事

これは大事な御通訓であります、要義として全文を詳細に御紹介してありますから、茲には略します。

法華修行の安心

大僧正 本 多 日 生

一、安心の意義

「安心」といふ字は素人を見るとあんしんする事といふ風に考へて、唯だ心が安らかになるやうな意味だと思はれるが知らぬが、それはこの字の義理をまだ本當に知らないのである。この場合に於ての「安」といふ意義は心の定まることを言ふのである、安定する、物に就て云へば安置する、例へば佛像を安置するといふやうな場合と同じ事で、精神の動搖を防いで、或る一定の心掛がどこまでも續いて行く事を「安心」と云ふのである。假名を附ければ「さだまる」と「とどまる」といふやうな意味である、心が定まる、心が止まるといふことである。それは「大學」の中に、

止るを知つて而して後に定まる有り、定つて而して後に能く靜かなり。

といふ言葉があります、あの「止る」「定る」といふ字がこの「安心」に當るのである。止まる所を知つて而して定まり、定まつて而して靜に處るといふその精神の状態を「安心」と申すのであります。

元來人間の心の弱點は、大切な事だと思つてもその心得が動くのである。寧ろ詭らな考の方は逐へども、現はれて來るのである。酒吞が酒を呑みたいといふやうなことは、忘れたいと一生懸命に考へて居

つても、その刻限が来ると「ア、呑みたいな」といふ考が力強く出て来るのである。善い方の親孝行とか信心とかいふことは、忘れぬやうにしやうと思つても「ア、つい忘れた」といふやうな風になるのである。それが人間共通の弱點であります。大體日本の言葉で「心」といふのはころ／＼轉げるといふ意味ナンである、玉の盤を走るが如くに、人の心は安止する所を知らない、ころ／＼轉げ廻つて、さうしてその轉げの上にも善い方が表面に現はれないで悪い方が多く表面に現はれる。子供が菓子屋に行つて能くやる玉轉がしといふものがあるでせう、玉を轉がしてさうして好い所が出たら一錢の錢で十錢の菓子を取らうと思つて轉がすい所が出なければ五厘ぐらゐの菓子しか呉れない、子供は一生懸命に十錢の菓子を取らうと思つて轉がすけれども、五厘の方が度々出て十錢の方は滅多に出て来ない、それで菓子屋は商賣になるといふやうな譯で、人間の心もそれと能く似て居る。ころ／＼と轉がして来てどこで止まるかといふと、五厘の方が始終上に出る、斯ういふのが人間の弱點である。そこで善き心掛の人、即ち修養を積み向上をしやうといふ者は心の善い所を上に向けて、さうしてその轉げないやうに突張りを掛つて置くといふことに出發點があるのである。その心の動かぬやうにするのを「安心決定」といふのである。だから唯我らがといふやうな意味とはまるで違ふ、止まる所を知つて面して定まる、今の玉の上等の所を上向きにして動かぬやうに轉げぬやうにして置くといふ意味である。それが即ち「安心」といふ言葉の文字の義理であります。それ故に宗教に於てはこの「安心」が一番大切な事になつて来るのである。信仰といふのは即ち精神が統一をして、これが一番善いと思ふ所を繰返して、その退轉をしないやうに、動搖をしないやうに持續確立して行かう、斯ういふことになるから「安心」が大切だといふことになるのであります。

二、宗教的安心

尙ほ次に「宗教的安心」といふことを少しく申述べて見たい。文字の義理は前段に申した通り「止まる」「定まる」といふことであるが、それが「宗教的」と制限せられると、その意味は一層明瞭にしなければならぬ。唯だ好きさうな所へ決めて置くといふことを考へて一生懸命に働かなければいけない、さうして今日は何でも夜が明けたら勤儉産を治めといふことを考へて一生懸命に働かなければいけない、さうして今日は幾ら儲かつたと寝るまで算盤を勘定して、サアこれだけ銀行へ預けて来いといふ風にして、十年一日勤儉産を治め忠實業に服するといふことを一生懸命にやる斯ういふ事を決心する。これも別に悪い事ではない、或は普通の考として、それが善い事だけれども、宗教では決してさういふことを一番善いとは言はぬ、一番悪いとも言はぬけれども、餘程下の方に置いて居るのである。

一番好い精神の据え所といふのは精神生活と稱して、人間の肉體に關する方ではなくして、この眞の自己たる精神が向上をして行く方向を辿るのである。その精神を維持して行く爲に肉體が食用だから、その肉體も世話をしなければならぬけれども、先づ以て精神生活を強く考へる、そこに始めて宗教の覺醒と言つて、一般人の酔つて居る、夢みて居る生活より一步醒めて進んで行く事が出来るのである。その事が決まつてから後へ戻つて、さうして今度は商賣勉強といふことに歸へるのもよい、頭から商賣勉強、終まで商賣勉強と言つて居るやうな者は、それは「宗教的安心」には少しも關係を持たない者である。その區別を知らなければいぬ。

一たびそこまで行つて戻つて來ると、行かずに初からそこに居るのとは、同じ事のやうでもその値打が非常に違ふのである。田舎の者が山の麓の田圃の處で生れて蛙の啼聲を聴いて、さうして一生東京も知らず横濱も知らずに暮して居る者は、山を見て蛙の啼聲を聴いても何の感興をも持たない、子供の時分から見た山、子供の時分から見た蛙がビョン／＼飛んで居るのであるから、それが爲に少しも特別の感興といふものは浮かんで來ない。これに反して都の生活をして居る者がしばらくその樂劇から去つて、さうして田舎の風景を愛してそこに精神の休養を取らうとして、行くならば、同じ山同じ河が非常な意味を持つてその人を慰め、その人を向上せしむる力になるのである。同じやうに田圃道を歩いて居つても、子供の時分から肥桶を擔いで都に一度も出た事のない者の見て居る山や蛙と、非常な複雑な社會に立つて精神的に奮闘をし、或は社會國家の爲に盡し居る者ゆ一日の閑を得てさうして畦道に蛙の飛ぶのを見て居るのとは、非常に値打が違ふ。丁度それと同じやうに、立派な精神生活の意味を了解した者が算盤を弾いて居るときにそこに非常な光があるのである。單に物質を物質として初から終まひ通はして行つた人間は、生涯を通じて清い光は現はれて來ない。

それ故に先づ以てこの精神生活に眼醒めて、それに就て動搖を受けないやうにするのである。「さう言ふても人生は錢が要るぢやないか、坊主だからと言つても壽司が食ひたからう、さうすればとにかく世の中は錢だ」と言はれて坊主の方でも「大きにさうだ」ツルツと頭を撫で、「やつぱり錢だな」と言つて錢を謳歌する位ならば、それは宗教的安心といふものを持たないころ／＼と轉じたのである。坊主の心がころりと轉じて元の俗生活に降服をしたのである。同じ壽司を食つても——それは坊主だからといつて壽司を食ふなどは言はぬけれども、その壽司を食ふのと自分の本分との區別が、何時も頭にチャーンとけじめがはつきりして居れば宜いけれども「やつぱり壽司は美味いな」といふやうなことを言つてころ／＼と轉じたがるのである。そこを宗教では禁物として「安心」々々」といふ言葉を言ふのである。

所がこれが何も坊さんばかりではない、苟も宗教を信じたといふ以上は、基督教でも佛教でも何れの宗派でも、爺さんでも婆さんでも、皆さういふ精神を失はぬやうにするといふことに於て、安心が大事だといふ言葉になつて居るのである。それを時々聴いた時だけはさういふ氣にもなるけれども、又長い間元のやうな精神状態に居るといふ者は、未だ曾つて眞の安心を得ないので、宗教の香だけ嗅いで居る、丁度饅頭の蒲燒の香を嗅いで通る位のもので、未だその饅頭を食つて居るものではない。宗教は一旦與へられて信心を決めた以上は、そんなにグラ／＼するものではない、グラ／＼する間は元のころ／＼と云ふべき人間で、未だ安心に來らない人間だといふことを承知して居らなければならぬ。「私も随分信心もやつて居りましたけれどこの頃は一寸止めて居ります」と云ふやうな信者が澤山ある、それは未だ安心に達せずして、何か富籤でも引くやうな積りで、やつて居つたらばいい事でもあるかと思つたけれども、どうも想ふやうな事もないから當分休んでも損もあるまいといふやうに、宗教の信仰を利害關係から觀て誤解して居るから休んだり止めたりするといふことが起るのである。それは洵に卑しむべき人間の精神状態である。

この精神生活の價值を極度に決心して掛るのである。だから暫くそれを明にする爲に身軀と精神とを引分けて——本來二つのものではないけれどもこれを分けて考へて見る。そこで首を切られるといふ場合に信心をさうするかといふ問題が起つて來る。その場合に「首を切られるナンといふことでは逆も信心ナン

か出来ない、大體信心して居れば家が焼けないかと思つてやつて居るので、首ごころではない、家が焼けるといふならば自分は信心など止めるのぢや」といふやうな人が多いでせう。さうすれば今度の大地震火災でこんな澤山家が焼けてしまつたのだから、皆信心は止めた方が宜い、成田の不動様などは澤山火伏のお札といふものを賣つて居る、それが一つも利き目がなかつた譯であるから、一遍に流行らなくなつてしまはなければならぬ譯だけれども、併し「あの時はまあ特別だ、今度は利き目があるかも知れぬ」といふやうなことで、やつぱり相變らず大勢の人がわい／＼お札を買ひに行くといふやうな譯であるが、さういふ風な事が宗教だと思つて居るのは非常な間違ひである。宗教に來る前には、先づ人間の總ての他の大事なもの、信仰とを天秤に掛けて見て、一切のものはこの信仰の價値には及ばぬ、精神生活の價値には及ばぬといふことをはつきり認識して掛らなければ、これは安心に這入つた人とは言へないものである。さう言つたからといつて何もそれでは早速首を吊れといふ譯ではないけれども、一旦信仰を決めて置いて、そこから戻つて日常生活の壽司も美味い、女房も可愛い、といふ所に行くのである。その區別が分らなくて宗教の安心といふものは、百年説教を聴いても達することは得られないであらうと思ふ。

であるから昔から偉い人の教は直接にその問題に這入つて行くのである。却つて平凡な者は「さう露骨に言うて大切なお客様に逃げられてしまつてはごうもならぬ」と思つて、商賣上手みたやうな事を考へてフラ／＼した説教をするけれども、お釋迦様とか日蓮聖人とかいふ偉い人が出て來られたならば「私は信心をしたと思ひます」と言へば「お前はこの人間の命と一切の世間の事柄と信仰との價値の輕重を心得て居るか」といふことを一番最初に尋ねられる譯である。だから不惜身命——身命を惜まずして但だ無上道を受すと、身は輕し法は重しと言つて、信仰ぐらゐ大切なものはございませぬといふことを申上げる。そこで「能く分つたか」といふことになつて始めて信仰といふものは許されるのである。その一番大事な所をはつきりしないものだから、「まあ／＼來て信心をやつて御覽なさい、商賣が繁昌します」とか、「少々不養生しても病氣になりませぬ」といふやうな話らない所から信心に引張り込んで置くものだから、動搖常なくグラ／＼するのである。

もう一つはその精神生活の價値から進んで、同時に道徳的實行といふことに移らなければならぬ。どうしても人間は善い事をするのが一番結構なことなのである。それだけが最後に残るのである。人生五十年七十年、過ぎ去つて見たならば何が儲かつたかといふたら、善い事をした方が多ければそれだけ儲かつたのである、悪い事をした方が餘計ならばそれが損をしたのであるといふ、この人生の得失といふことを今日の物質的利害に置かずして、道徳的の價値に於て、自分の一生の行爲を判斷せよといふ、この評價方法に確固たる精神を据付けて居るのである。時に依れば、善い事をするといふよりは利益を取つた方が好いといふ感じが起るのであるけれども、その時利益を得て非常に旨い事をしたやうでも、人間一生過ぎ去つて見れば、自分の儲けた錢が株券になつて居つても、それは息子とか他人が使つてしまふのであつて、儲けた錢は人に使はれて、悪い事をした罪は自分が背負つて行くといふことになれば、どうもこれは引合はないなといふことがはつきり分らぬければならぬ。それがグラ／＼して、さういふ氣にもなつたり、いや又錢が大事だと思つたりするやうな事では、宗教的安心を得た人とは言はない。精神生活に生きてさうして道徳的の實行に眼醒めてやつて行く、この決心を如何なる事情が起らうとも變更致しませぬといふことに

於て、始めて宗教的安心に進んだ人と言ふことが出来るのである。それは原則としてモウ世界の通り相場であつて、これに反した宗教といふものは殆ど宗教としては問題にならないものである。

三、法華修行の種類

そこで次に「法華修行の種類」といふことに就て申して置きたい。法華經は一つであるけれどもこれを修行して行く方法は様々なり、と日蓮聖人も仰せられたが、その色々様々の中に於て、大した値打のない事は今茲に多くを論ずる必要がない。大した値打がないといふのは、觀音様を信心して居るのも、法華經の「普門品」だとか「陀羅尼品」を讀んで御祈禱ばかりして居るのも、法華の行者だとか、或は法華經の文字を石に書いてそれを土の下に埋めて塔を建てるやうな一字一石の行と言つて、六萬九千三百八十四文字の法華經の文字の數だけ圓い格好の好い石を河原で拾つて来て、それに一字々々お經の字を書いて經塚を造つたといふことも、別段泥棒をして居るやうな悪い事でもない譯だけれども、さういふやうな法華修行といふものは随分閑人がやつたものである。金持の奥様などは別に用事がないものであるから、まるい石を下女に言ひ付けて拾はして、それに次から次に字を書いてさうして地の下に埋めるといふやうなことをやつた。その外色々あるけれども、そんな事は法華修行と言つた所で問題にする程の事ではないのである。

この法華修行の種類に於て大に論究して置かなければならぬのは、二つの問題に分れて居るのである。一つは「智行」と言つて智慧觀念を以て、法華經の教に隨つて宇宙の實相を觀察し、又個人の本體を觀察

して進んで行く、宇宙觀、人身觀を智慧に依つて統一しやうとするので、天台智者大師が出て法華經に基いてこれを主張せられた、それは「法華止觀」と稱する書物があつて、止觀の妙行、法華三昧、さうして天台の觀念觀法の行といふものが發達をして來て勢力を持つたのである。所がそれから後に日蓮聖人即ち立正大師がお出ましになつて、さうして法華修行の上には「信行」といふものが大事である、智行は今日の時代には合はないのみならず、法華の極意にも達しないものであるといふことからして信行を開發せられた。それは「信」といふのは信順恭敬の心であつて、佛様の有難い事を信じ、佛様の教の意味を信じて行くのであるが、その信行が智慧觀察よりは宜しいといふことを日蓮聖人が論證せられたに就て、茲に日蓮門下の修行といふものが起つたのである。表面は題目を唱へて居るといふけれども、唯お題目を唱へるといふさういふことではない、唱へ言葉は題目に相違ないけれども、その信行の内容といふものがあるのである。この信行に就てやはり色々の間違ひがある、粗末な信行とも言ふか、信行に似た邪行といふものがある。さういふ下らないものは——題目を唱へながら迷信になつて居るとか、下らない考になつて居るとかいふやうなものは、學問上の問題にはならないのである。

そこで學問上研究をすべきは、信行そのものが孤立的に考へられて居る意味合、孤立的といふのは信心といふことを非常に貧弱に考へて、智慧と徳といふ二つの側の考を持たない。「我れは無智であるが故に信心をするのである」「我れは易い修行を求むるが故に信心をするのである」と言つて、その信行の基礎に智慧を踏へて、その信行の結果に徳を行ふといふ、智と徳といふものを包んで進んで行くといふ信行を考へない。それはざらつべしの雜炊法華、ドンドコ法華、平法華といふものを稱するのである。その方が善い

やうに考へて、何も要らぬ、智慧などは要らぬ、徳も要らぬ、唯信心をすれば宜い、それが一番易いといふやうなことを標榜して進まんとする者であつて、これは淨土門かぶれの日蓮門下はさういふ風に行くのである。

その反對に内含的の信行といふのは、この智と徳とを内含して居るのである。表面には智慧を立てないけれども、我が信行を調べて行つて見るといふと、智慧の極點に於てその信心に達しなければならぬ、智慧を忘れて信心して居る譯ではない。唯智慧といふことに止まるのはだ低いのである、親が大事だといふことを研究してそれを知つたといふことは、親に實際の孝養を盡して行くその情操の動いて居る者に較べたならば、親には孝行しなければならぬといふ事を知つたゞけの者はまだ低いのである。智は實際に親は孝行をする力となり情操となつて發現して行かなければならぬからして、日蓮聖人の教へる信心は、天台の學問から言つても、觀念から言つても、どこから言つても、その信に達しなければ満足し得られないといふことを、「立正觀」と稱して御主張になつたのである。正しき智慧、正しき觀念の極處に於て我が信は確立せられて居るもので、決して智を排斥して信に立籠つた孤立貧弱なるものでないといふことの爲に、日蓮聖人は非常に苦勞をして色々と説明をなさつて居る次第である。

その點が淨土門や眞宗と日蓮聖人の行き方の違ふ所である。單純な信といふものに達した情操の有難いといふことは皆同じやうに見へるけれども、その「あゝ有難い」といふ信念を組立て、居る土臺がコンクリートの大磐石で出来て居るものと、ガサ／＼した砂の上に組立て、居るのととの違ひがあるといふことを知らなければならぬのである。日蓮主義の信行は、その基礎に如何なる堅實なる智慧と雖もこれを歓迎し

て、尙ほその智慧の足らざる所を指導して、最高の哲學、最高の眞理の上に建設せられた所の信念であるといふことを標榜して居るものである。今日まではさういふ風な信念が世界的に多くまだ認められて居ない。それは即ち世界的文化が未だ完成せざるが故に、哲學と宗教とが分離して居つたり、宗教と道徳とが分離して居つたりするこの今日の文化といふものは決して尊といものではない。昔のやうに譯が分らずに、哲學も宗教も道徳も混同して意味の分らぬやうなさういふ難解的思想もいかぬ、けれども、これが徒らに分化して哲學は哲學、宗教は宗教、道徳は道徳と分れたことだけを知つて、分れた以上に再び大握手を爲すべき更に大いなる進歩を認め得て居らぬのが、現代文化の未成品たる所以である。決して混同するのではないが、哲學の領分からも段々に進んで行つて見るといふと、それは宗教と握手しなければならぬといふことが能く分つて來るのである。それ故に法華經の思想、日蓮聖人の信行は、即ち世界の文化の未だ辿りつゝある所を進んで指導して居る所のものである。

斯ういふ重大な問題は、實は人類文化の爲に極力研究を爲すべきものである、國力を傾けてゞも研究すべきものである。色々の調査會などを設けられるけれども、さういふことはさう大行にせないでも、諱でも本氣に考へれば分る事である。斯ういふ大切な哲學、宗教、道徳の調和點、一國の文化を如何に指導するかといふやうなことは本當に研究をしなければならぬ。唯西洋に留學生を送つて、少しばかりの文化の端くれ位を調べて戻つて來てゴチャ／＼言ふやうな者を幾人も殖やした所が大した事ではないのである、もつと本當に責任ある文化の大方針を確立しなければならぬ。同じ事を何回も繰返して居つた所が同じものは同じものぢや。

そこで法華修行の種類に就ては智行、信行の別あり、信行の中には孤立的にして智と徳とを否定したる貧弱なるものと、智と徳とを併せ成したる、即ち基礎に智を置き實行に徳を尊んで行の所が信行といふものがある。日蓮聖人のはこの内含的なる、智徳を併せて進んで行く方の信行であるといふことを決めて、それから安心を考へないといふと、唯法華安心と言つてもよく安心といふものが出来て来る。初の着想が間違つて居るから、何でもかまはぬ、「智慧と言つたつてそんな事を知るものか、道徳？そんな事は知つたものかい、俺は俺の腹で好いやうに決めたんだ」といふやうな獨斷固陋の、譯分らずの頑々固々たるものが出来ては始末に終へない。如何に條理を以て論しても「そんな人間の條理なんか三文の値打もあるものか」斯ういふことをしなければ人間の道徳が立つのいと言つても「人間の道徳ナンか高が知れて居る、人間が一生悪い事をした所が高が知れて居るぢやないか、この有難い信念を一度起せば五億萬圓くらゐの値打がある、人間が幾ら悪い事をして精々三十萬圓が五十萬圓のものだ、そんなものを仕拂つたつてまだ、こんなに残つて居る」といふやうなことを以て、信の偉大なる力のみを説いて社會の進運を妨害するやうな宗教がそこに現はれて来る。それを淨土門や眞宗など、同じやうに引受けて同罪なりと判決せられなければならぬやうな者で日蓮門下にもある。實に左様な事をしたのは立正大師の御聖訓に對して相濟まぬ事であるといふことを先づ最初に考へて掛らなければ、法華修行の安心は分らないのである。此處まで話を進めて來ると、この次には初めて「法華修行の安心」といふ講題の意味に入ることが出来るのである。

四、法華修行の安心

この言葉は私が新しく考へたのではない、日蓮聖人の聖訓の「守護國家論」の中にお示しなされて居ることである。それは「肇公、法華翻經の後記に云く。羅什三藏、須利耶蘇摩三藏に値ひ奉りて法華經を授かる時の語に云く。佛日西山に隠れ遺耀東北を照す、茲の典、緣東北の諸國に有り、汝慎で傳せよ已上。東北とは日本也、西南の天竺より東北の日本を指すなり」とある通り、法華經が日本の國に縁があるといふことが、不思議にも羅什三藏が天竺に於て師匠の須利耶蘇摩三藏といふ人より法華經を授かる時分に、さういふことのお言葉があつた、その事を支那に於て法華經を翻譯した時に、羅什三藏が弟子の僧肇といふ者に言ひつけて、法華經の末文の所に書かしてある、それが肇公の「翻經の記」といふものである。今も一切經の中にある、法華經の終りの所には、その通りに書いてある。その翻經の記に促されて惠心僧都といふ比叡山の學者が「一乘要訣」といふ書物を書いた時分に、この日本の國は他のつまらない教を持つて來べきものではない、法華經のやうな整うた教に依つて國民を導きさへしたならば宜いのである。田舎の雜貨店のやうに傘三本、下駄三足、蠟燭五本といふやうな、そんなものをゴチャ／＼と並べて置かなくとも宜いのぢや、完全に法華經の教を以て進んで行きさへすれば、朝廷に居る人も或は民間に居る人も、遠い所も近い所も残らず、坊さんも信者も、貴さも賤しきも、總てが法華經に依つて信念を決定して宜いのであるといふことを書かれた。この肇公の書いた法華の跋文と、惠心の書いた「一乘要訣」の文に就て、今の日本の人達は能く考へて見るが宜い、さうしたならば安心々と云うて唯安ければ宜いといふやうな

易修易行の安心といふことの爲に、貧弱困陋なる「南無阿彌陀佛」といふやうなことの方へずつて行くことは出来ぬぢやないか。即ち「法華修行の安心」といふことを企てて、同じ安心といふならば法華經に教ふる所を受け持ちて精神を据えんければいけないではない。かこのコロ／＼と轉げた心の据え所が何處へ据えるのぢや。「一番安い所へ……」と云ふやうな譯で、グル／＼と廻つて見て淺草の千束町の裏の方の本賃宿の、而もその中でも一番安い所へ……と云つて押込んで行くと云ふやうに考へるのは間違である。人間は已れを反省して、已れの足らざる所を省るのも一つの徳ではあるけれども、それよりは已れに顧みて已れに尊きものゝあることを發見する方がより大切な心得であると思ふ。例へば日本人に缺點もあるけれども、日本人に缺點のあるといふことだけを調べて、それはかりを氣にして、「日本人はつまらぬ者ぢや、斯ういふ缺點がある、あゝいふ缺點がある、値打の無い者ぢや」といふことを、一部の學者が盛んに言うて居るが、つまらぬ所も反省しなければならぬけれども、先づ以て日本人には世界に誇るべき斯の如き美點があるといふことを明かにして、そこを忘れぬやうにして行かなければならぬ、その位のこと分らぬでござるか。所が今の學者でもさういふことが分らぬ人が澤山ある。何ぞといふと、「いや日本人は斯ういふ所がいかにぬ、いや斯んな工合であるから日本はいかにぬ」といふやうに、何でも日本の悪い所を言ひさへすれば能事終れりと思つて居る。それは皆佛念門徒と類を同じうするものである、念佛が無間ならば今の學者も無間地獄疑ひなしである。

そんなに人間の弱點ばかり言うて見た所が仕方がないだらう。それはもつと人間といふものを能く研究して見れば分る。極くつまらぬ人間には、悪い所だけを言うても幾分かそれが教の意味をなすのである。

極くつまらぬ人間といふのは、人殺しをしたり、泥棒をしたり、搔つ拂ひばかりして仕方のないやうな奴には、その言葉に依つて反省をすれば、搔つ拂ひが止んで、泥棒が止んだといふだけでも幾分か宜いけれども、それはもう情落の底に落ち込んだつまらない人間に對して言ふべきことばある。人間の一人前といふものは、何事か善い事をしようといふ意味から向上せしむる點がなければならぬ。悪い事をして居る者が唯その悪事を止めただけでは、まだ人間一人前にはならない。「私は何も悪い事をしませぬ、その代り何も善い事もしませぬ」と言ふならば差引勘定零ぢやないか、そんなことでは存在の意義がない。だから人間の悪い所を反省さすだけならば、恰も部屋の中の闇をバケツで掻出すやうなものだと佛様は御説きになつた。大涅槃經の中には、一切經にはさういふ人間の反省をする例と、又一面光を現はす例との教があると云ふことに就て、自ら立派に解釋をなされて居る。さういふ釋尊の偉大なる教訓を何故能く研究しないのである、釋尊は、人が斯ういふ所が悪い、あゝいふ所が悪いといふ消極的の反省を促すだけの教訓といふものは、恰も家の中の闇を掻出すやうなものである。「斯う暗くては仕様がな、もう少し明るくしなければいけない」と言つて、闇をバケツに汲んで掻出し、袋を拵へては持出して、澤山の千も二千もの袋に闇を詰めては、「この内に闇が入つて居る、さあ放り出せ」といつてならばこの闇を袋の中に入れて外へ放り出して、依然として暗い部屋は何處までも闇である。そんなことをするよりも、その家の内に一つの光を點せよ、今ならば電氣があるから、電燈のスイッチをひねれ。バツとそこに百獨光の電燈が一つ點けば、今までの闇は一逼に何處へ行つたか無くなつてしまふ、「もう一逼闇を尋ねて來い、少しばかり闇をこの袋の中に入れて來い」と言つても、もう採すことは出来ない、闇は全滅せられて光と共に闇は存しない。そ

のやうなものである。何故人間の心の中に一點の光を點せざるかといふのが、釋迦如來の教ではないか。それであるからこの法華修行の安心といふことを日蓮聖人が言はれたのである。淨土の安心と法華の安心の違いは、闇を袋の中に入れて掻き出すと幾ら努力しても闇が除かれないのと、電燈のスイッチをひねれば一運に闇の所在を尋ねて来いといつても所在が分らぬといふ程の違いがあるといふことを意味して、茲に「法華修行の安心」といふ言葉が現はれて居るのである。

さういふことはこれ亦法華の信者が一般に心得て置かんければならぬ。「法華修行の安心」と言うたならば「ウンさうだ」といふ所の誇りを以て、さうして自分の尊いものを輝かして行くといふことを考へなければいぬ。それを向ふが安いと言つて出て来たからこつちも安いんちやといつて、安賣りの競争に出かけたものだと思つたら大變な間違ひである。こちらは安い高いを問題にして居るのではない、如何なる賈い人も如何なる愚かな人も、金持も貧乏人も、そんな安宿見たやうに「俺れの所は貧乏人ばかり泊めるのだ」俺れの所は穢ない者ばかり客とするのだ」といふやうなぢやない。總ての者と同じやうに待遇して行くのであるから、貧乏人も金持も、賈い人も愚かな人も、皆同じやうに扱ふのである。だからして大體警が違ふ、宿屋見たやうなものに譬へるからいかぬ、釋迦如來は雨の降ることに譬へられて居る。一つの雨が降ればごんな大きな木もごんな小さな草も、皆平等に雨の潤ひを受けて行くのである。決して雨に於ては、大きな木だからお前の所には餘計降らす、小さな草だから少し降らすといふ譯のものではない、平等に法雨を降らして、決してそこに差別を置かぬといふのがこれが釋迦牟尼の教である。さうぢやんと明かに説いてあるぢやないか「貴賤上下、持戒毀戒、威儀具足せる及び具足せざる、正見邪見、利根鈍根に

等しく、法雨を雨らして解悟なし」(要草論品)といふのが佛法である。木賃宿見たやうに安い者だけ對手にして、「お前は一体宿屋に泊まるといつても錢が幾らある、中々この頃は宿賃が高くて、東京の帝國ホテルへでも泊まればお茶代だけでも五十圓も置かなければならぬ、それでも一番安い所ぢや、宿賃を拂つて翌朝勘定といふ時分には五十圓も取られるぞ、それより俺れの所へ泊まれば一圓五十錢で済む、その方が宜いぢやないか」といふやうな説き方をして「大きにさうでございます」といつて日本人を木賃宿へと追ひ込んだやうなこの宗教といふものは、決して歡迎すべきものではない。これは辯護をすればいろ／＼の言ひ方が立つけれども、さういふ辯護は無駄なことである。難波大助の裁判には辯護人が三人附いたけれども、それはホンの形式的のもので、あゝいふ大連を犯したといふやうな者には辯護の餘地は無い。それと同じことで、日本人に對して安いものが宜いといふやうな方面から教を與へるといふやうなことは、辯護の餘地のあるべきものでない。教といふものはそんな所から進むべきものではない。

これを儒教で考へて見たらば能く分る、聖賢の教から考へて見たらば直ぐ分ることである。又大和魂が考へて見たら直ぐ分ることである、易きを求めて難きを避けるといふことはこれは屢拔のやることである。何事でもさうである、商賣でも自分の努力することを厭うて、何でもやさしい商賣が宜い、まア左官の土ぢやねでもやつて居つたら別に勉強をしなくとも出来る、壁の土へ水を入れて足で踏んで居りさへすればそれで宜い、一番易い商賣である。或は蒟蒻踏が一番易い、朝から晩まで桶の中で踏んで居つたら宜い、これが一番楽だといつて、左様な易きを求めてそこに止まらんとする者は、永久に向上進化することの出来ない、七十になつても蒟蒻を踏んで、さうして木賃宿に歸らなければならぬ憐れな人間である。人間の

向上心といふものを策勵鼓舞するといふことを、道徳や宗教が忘れては相ならぬ。釋迦が安心を與へるからというても、そんな唯安心というて何處でもあんしんしてそれで宜しいといふやうなことを、諦めだナンといつてへこたれるやうな、さういふことを言ふのではない。人間の心の据え所が安心の目的である。それ故にそんなつまらない所に安心して、それで宗教が人を慰めたり人を喜ばすと、いふやうなことならば、そんなことはやらぬ方が宜いのである。つまらない所に安心を與へてしまへば、もう人間といふものはそれから以上に進めなくなる。それ故に左様な低級な宗教の安心を宣傳するといふことは、それは古い昔からもういけないことだと相場が極つて居る。希臘の古い學者もさういふことは攻撃して居る。「宗教ちや、宗教ちや」といつて安んずる安心を人に與へて、學問も要らぬ、道徳も要らぬ、向上心も要らぬ、唯なんなど食べたら宜い、芋の尻尾を食つて水を呑んで居つたら宜い、それも食へなくなつたら息を引取れば神様が助けになるといふやうな、左様な消極的の安んずる安心を以て人に安心を與へるといふやうなことはせぬ方が宜い。その位ならば寧ろ豚が一番宜いではないか、豚は向上もなければ發展もない、糠を與へられれば糠を食ひ、芋の尻尾を與へられれば芋の尻尾を食つて、ブウ／＼と言つて一生を終るのである、彼には大した煩悶もなければ苦しみもない、豚の生活が一番幸福な生活だといふことになるではないか。人間はさうではない、豚よりは苦勞が多い代りには、そこに意義あり向上進歩を意味するのであるから、「豚となつて安心せんよりは人となつて煩悶せよ」と西洋の學者も言つて居るではないか。下手な宗教は人間として豚の眞似をして、人として心配せんよりは豚となつて安心せよといふことを教へて居る所のものである。そんなものが從來宗教として類が多くなつて大きな顔をして居るから、それが當り前のことに思は

れて居るけれども、今日尙ほ彼等が説教し居る意味合を嚴格に調査し批判を與へて御覽なさい、私が言ふ通り人間の向上心をぶち壊して居るものである。宗教や道徳が人間の向上心を壊はすといふ事はご恐しいことではない。

それ故に日蓮聖人の守護國家論に於て「法華修行の安心」といふ言葉の出で来る時には、さういふ強い意味を以て聖人はこれを御書きななつたものであると思ふ。

そこでこれを法華經の本文に照らして見ると、「藥草論品第五」の所に「未だ安んずる者を安んせしむ」といふ言葉がある。これは「安んずる」といふ字はあるけれども、今申した安心の心の据え所といふことは違ふのである。一部分の精神の不安を除いて、そこに所謂安心を得、慰めを得るやうな意味を言うてゐるので、若しこの藥草論品に就て言ふならば「未だ度せざる者を度せしめ、未だ解せざる者を解せしめ、未だ安んずる者を安んせしめ、未だ涅槃せざる者を涅槃を得せしむ」といふこの四つの意味合を總括して、そこに精神の坐り場所が出て来るのを安心と云ふので、唯一つの中にも慰安を受けたとか、まアまアこれで結構だとかいふものだけを言ふのではない。故に法華の文を引くならば、決していきなり「未だ安んずる者を安んせしめ」といふやうな言葉を擧げてはいけけないのである。「勸發品」等に佛の誠められて居るやうに、諸佛に護念せられ、諸の徳本を植ゑ、正定聚に加はり、一切衆生を救ふの心を發すといふやうな、自分の信念と道徳行爲と、そこに精神の据え場所とが極つたその全体を、これを「法華修行の安心」と言はなければならぬ。まア／＼斯うやつてさへ置けばこれで宜しいといつて、小さな所に自分の心を据えつけたといふやうなそんな、貧弱なものを安心といふのではない。そこに兎角誤解が起るからし

て、それを研究する必要があるのである。

又「譬諭品」に「その心安きこと海の如し、我聞いて疑網を斷せり」といふ文がある。これ等は幾分か精神の坐はり場所に關係して居るけれども、これも唯疑ひがなくなる、そこで心がすが／＼した、これで先づ狼狽る所もないといふ意味合であつて、斯ういふ場合に「その心安きこと海の如し」といふだけでは、私はまだ「法華修行の安心」といふ言葉に引くことは出来ないと思ふ。

然らば私の言ふのはどうであるかといへば、私の茲に言ふ「安心」といふ意味は非常に内含的なものである。それは最初に申したことだからだん／＼研究すると自然にさういふことになつて来る。故に茲に「安心」の内容を分拆分解して見ることが必要であると思ふ。

大僧正 本多日生師著 **本尊論**

目次
一、緒言……二、宗教と本尊……三、諸種の本尊觀……四、本尊と真經……五、本尊と論理……六、本尊と救済……七、佛敎の本尊觀……八、佛敎の三寶觀……九、佛身觀の歩歩……一〇、滅後信仰の次第……一一、佛敎本尊の三方面の考察……一二、法華經に關はれたる本尊……一三、遺文に關はれたる本尊……一四、本尊の對諸文……一五、本尊觀の實例……一六、遺文の合適……一七、異論の解決……一八、結論

定價 布製一部 金七十錢 送料金四錢

發行所 (紙製は品切れ)

立正結社

名古屋東區田代町常樂寺内

編輯局

編輯名古屋一〇八一番

豫約出版廣告

大僧正 本多日生親下序
海軍中將 佐藤鐵太郎閣下序

松尾鼓城 著 **紙墓**

(一名 五憲法雪冤)

出版者 (順不同)

- 大迫翁 道閣下
本多日生親下
矢野茂 閣下
佐藤鐵太郎閣下
能仁事一 閣下
早川龍介 閣下
依田光二 閣下
波多野三郎 閣下
小西久遠先生
野口日成 閣下
赤村日成 閣下
南都鐵太郎閣下
清岡長言閣下
故木内重四郎閣下
曾川龍風先生
山根日東 閣下
松本堅晴 閣下
熊井本光 閣下
梅澤莊夢 閣下
成島龍北 閣下
竹内顯領 閣下
中村日鏡 閣下
西友日鏡 閣下
大僧正 宗務總監
長生郡

著者松尾鼓城、大舊事記の宛を思ふこと廿年、今病氣癒えざるを慮ふて遺稿の心を以て大舊事記並に五憲法を雪冤す、蓋し鼓城が熱血に燃ゆる勤王の志操と深信なる教法報恩の顯露なり。

本書の大意は、日本書記を押へて古事を揚げんとしたる古事記傳に反抗し、又三百年來冤罪を蒙りし大舊事記、大成經の爲めに雪冤し、尙ほ十卷舊事記のために翳雲を拂ひ、又十七憲法の相違點を指摘し、聖德太子五憲法を紹介し、調譯し、以て眞乎十七憲法をして神儒佛の三道の光輝を耀かしむ、本書一たび出で、新井白石、加茂真淵、本居宣長、多田義俊等の先輩大人皆顔色を失ふ。

古奥及び聖德太子を研究せんとするものは非一讀すべき珍書なり。
右三百部を印刷し豫約を以て有志諸君に頒たんとす、乞ふらくは至急御申込を乞ふ、申込は只だ葉書に「紙墓豫約に應ず」の御通知にて宜し、代價は壹冊參圓内外の事。

豫約申込所

千葉縣長生郡二宮本郷村押日

東天社

社會問題と佛教

醫學博士 石田 誠
講 師 岡 山 三 次 郎

人間の生活をして理想の彼岸に向上せしむるものは佛教である、社會問題は人類の社會的生活を改善して萬人の幸福を増進せしむるための近代人の叫びであり運動である、此の複雑なる社會問題を如何にして解決するかは一般の識者に依つて研究せられつゝあるが、吾人は佛教精神の根本的立場から此れを觀察し識者の批判と叱責を仰がんとするものである。今や世界の歩みは黄金萬能の世界から思想中心の時代に推移し來つた、思想があらゆる生活の最大權威者とならんとして居る、其處に社會問題が生起して來た所以である、社會問題の中心思想とは何ぞ、自由、平等の思想である。世界戦争以前まで世界を支配して來た最大の權力

有するため最も眞劍味をおびて居る、それは常に労働者の問題であるばかりでなく資本家自身の問題である。産業は資本と労働との共存である、資本家の資本と労働者の労働に倚りその成果たる利益を収めることが出来るのであつて資本のみ労働のみに依つては生産は出来ない、故に理論上から言へば生産に對する資本家と労働者の地位は對等であつてその生産利益の分配は相等しい、然るに現在の状態は富の分配が資本家に多く取得せられる、資本家と労働者との雇傭條件は自由契約の下に於かれ資本家の横暴なる專制的條件に労働者は屈服するの外にない、斯くして資本家は剩餘價值によつて益々私有財産を増大し労働者はいよ／＼救はれない貧困の底に陥り富の差は著しき懸隔を生ずるに至つた。労働者は資本家の專制より自由と平等を要求し此れを確保するための手段として同盟團結し協同團體の力を以て資本家の労働待遇の改善を要求する、然してその要求

は富國主義、征服主義、資本主義、個人主義であつた、然るに戦後に於て平和主義、平等主義、自由主義、團體主義が急速力を以て戦前の主義に肉迫して來た、今や世界は自由と平等との絶叫に依つて新らしき文化に入らんとしつゝある。

代議政治は君主獨裁政治に對し自由と平等とを要求する人民の國政參與である、普通選挙は納税額によるブルジョアジーの制限選挙を撤廢して、あらゆる國民に選挙權參政權を與ふる選挙制度であつて即ち政治上の自由と平等とが認められた譯である、而して理想的の普通選挙はもつと向上しなくてはならない。今日世界中の大問題となつて居るものは産業上の社會問題である、此れは實際生活に直接關係を

の容れられない場合は同盟罷業を以て資本家に肉迫する。而し労働時間の短縮、労働賃銀の増加を目的とする労働運動は労働者の經濟生活を根本に解決する根底にはならない。労働運動の主要點は、生産分配權の獲得である、此の主要問題に觸れない労働運動は無意味の盲動である。生産機關の私有を禁ずることに依つて富の分配を公平にすることが出来ること主張するのが社會主義の運動である、社會主義者は「富の分配の不公平があるゆゑに不幸罪惡の根元である。故に多數人類の自由と幸福のために資本家の專有する一切の生産機關を人類、國家、あるひは労働者の公有に移さなければならぬ」と主張して居る。そしてそれを實現するための手段方法に依つて種々色彩を異にする。國家の存立、國家の權威を肯定し、その國家權力に依つてあらゆる生産機關を國家の公有となし理想を實現しやうとするのが、即ち國家的社會主義である、其

他、急進的、革命的、直接的の分子を多分に含むものには危険なる過激主義、サンヂカリズム等がある此等は社會主義の一種の分派である、社會主義の歸する處は生産機關の公有に依つて富の分配を平等ならしめ、無産階級を資本主義の専制から自由の地位に解放し、多數人類の自由、平等、幸福を獲得するの主義である。然しながら労働者自身の利得のみを考へ、徒らに有産階級を敵視し其の存在に對して反感を懷くが如きは眞の意味に於ける、自由、平等、幸福ではない、それは、勞資一體の共存共榮と矛盾撞著するものである。産業上の社會問題はたゞ無産階級だけのデモクラシーではなく、有産、無産、凡ての人類を、自由、平等、幸福たらしめねばならぬ。さもなくては眞に自覺した労働運動の核心に觸れないこととなる。労働運動者が大團結力を以て資本家を強制せんとするが如きは自己矛盾に陥つたものと言はねばならない、それは資本主義的専制に代ふる

に労働主義的専制を以てせんとするものである、若し労働者の大團結が必要であるならば必ず資本家を強制せぬ團結であらねばならない、資本主義的専制の制度から労働者を解放して、自由、平等、幸福を得るための團結はデモクラシー的運動であるが、資本家を脅迫するための團結は専制主義的運動である。

眞實の自由と平等には、自他の對立がない。あらゆる人類は平等に自由であり、平等に幸福であり、平等に人格として尊敬せられる、あらゆる人類は目的に於て常に一體である、全人類の幸福増進である、特殊な社會階級の幸福増進ではない。元來、自由と平等の世界は凡てが自己である、全人類一體を自己とする處に純眞の自由と平等の理想が出現する、於諸衆生、若視自己とは一切人類を一體の自己として愛せよと佛陀が教へた金言である。自由とは他より強制せられず、又他を強制せぬことであらねばな

らない、他より強制せられることは不自由であり、他を強制することは自由でなく放縱である。眞の自由は自覺、節度、義務、秩序の觀念を背景としてこそ始めて得られるものである、放縱は此の觀念を没却した盲目的壓制である。

人間は孤立しては生きられない、必ず社會的生活に倚つてのみ生き得るのである、社會的生活には社會人の守るべき規約、即ち社會的秩序が、社會人の自由意志に依つて創成せられ遵守せられねばならない。平等といふ言葉は極めて抽象的であるが平等の意味は非常に誤解され易い、差別を認めない平等は所謂惡平等である。差別即平等、平等即差別、善良なる眞の平等は差別に即した平等であつて、差別をして差別たらしむるための平等でなくてはならない。現代人の要求する平等とは人類が社會生活に於て得べき機會の均等を意味するのである、政治上に於て此れを見れば萬人が政治に參與する機會を平等に

持ち得ることである、政治的才能を有する者が自由に天賦の才能を發揮する機會を付與せらるゝことである。産業上の専制組織では生産分配權が資本家に獨占せられ労働者は富の分配に参加するの機會が與へられて居ない。資本家は財産の私有に依るが故に馬鹿でも懶惰者でも資本の力に依つて剩餘價値を獲得し贅澤を極め高慢にも社會を我物顔に占領する、然るに無産者は如何に才能があり、勤勉であり、努力家であつても労働者としての自由契約に據る僅少の勞銀しか得ることが出来ない、資本家が自動車を買はして豪遊し、労働者は汗と脂を流して働いても一家の生計が立たない、若し萬人が平等に生産分配權に参加するの自由が許されるならば斯うした不公平不自然の現象はなくなるであらう、即ち生産分配權の自由平等参加。此れが近代人の要求する産業上の機會均等である。即ち現代思想の要求する平等は萬人が社會的生活に参加する機會均等。各自が社會

の一員として社會共同善のために努力するための機會均等、これが現代思想の平等であり、それを要求するのが現代思想の主張である、機會均等は差別に即した平等で差別を差別ならしむる平等である。

萬人平等の生存といふことは萬人自由の生存である、平等と自由は人類の友愛、協同に依つて實現せられ、更に萬人の平等、自由、友愛、協同の生存は、すべての人間が人格として認められる時、萬人の幸福は得られる「人類一體ニ自他不二」の基礎的觀念を離れた、平等、自由、友愛、協同、幸福、人格は、局限せられたる一部分の、平等、自由、友愛、幸福、人格であつて茲に大なる自家撞着と矛盾を生じる、向に「人類一體ニ自他不二」の觀念は社會問題の最初であり又且、最後である。

佛敎は、一切平等の見地に立つて、萬人の由自幸福と、人類の友愛、協同、平和を旨と教ゆる宗教である、現代思想は専ら物質的社會の改善に依つて理

想を實現せんとするに對し、佛敎は専ら精神の改善に依つて最高の理想を萬人の心に開拓せんとするのである。人類は成佛することに依つて萬人平等の存在の根據を認め、其れに依つて中心の満足と大安心を獲得するのであつてそれが証悟である。「我、一切衆生を觀るに衆生皆、貧欲、瞋恚、愚痴の煩惱の中に、佛智、佛眼、佛身を具へて儼然とし動かさず、善男子よ、一切衆生は煩惱の中にありて常に汚れざる如來藏あり、徳相具はりて我と異なることなし。譬へば眞金は不淨の中に墮ち隠れて現れず、年を歴るも眞金の質は壞れず、而も知るものなし、唯、天眼あるものは能く眞金あることを知るべし」教へと又、「一切衆生悉有佛性」と説き汎神論的には「狗子有佛性」草木國土悉皆成佛」と説かれて居る、「一切衆生悉有佛性」は實に大乘佛敎の根本信念である。法華經の常不輕菩薩は罵言、打擲する者にも「我敢へて汝等を輕しめず、汝等皆當作佛すべし」とて合掌禮

拜讚歎遊ばされた。

現實の社會が種々複雑なる問題を起すのは要するに現實の社會が重篤なる病氣に犯されて居るためである。其の重症的狀態の社會を健全なる社會に救済するのが佛敎の目的である、社會は要するに人間の心の反映である、精神が根本で社會は末葉である、故に社會の疾患は人心の疾患に其の病源を發して居る、故に精神の改善を外にして社會の改善は意味をなさない、従つて社會問題の根本的解決は佛敎精神の發揮に依つてのみ解決せらるゝのである。

人心を最も博するものは貧欲、即ち所有慾である。貧欲は自他の自由、平等、友愛、協同、幸福、平和を覆す處の迷界の大魔である、自他俱に貧欲を捨て去ることに依つて、複雑なる社會問題は根本的に解決せられる、佛陀は布施をすゝめ、平等を重んじ、階級的差別を認められなかつた。諸法は無我であり、一切は皆空である、現に自己の所有す財産は自己の

ものでなく、即ち佛よりの預り物である、預り物なるが故で一層尊重し、佛の御名に倚つて此れを必要に應じて佛子たる萬人のために布施してはならない、人間は生きんがために働くにはあらずして生くるが故に働かねばならない、即ち働かざるに値上げない無要求の労働、生存の感謝として労働の奉仕でなくつてはならない、働かざるに値上げず感謝としての労働には必ず生活の必要物質は供養せられる。

自己をよりよく生かさんとするには、先づ他をよりよく生かさねばならない、複雑した社會問題の解決は即ち自他共存の原理、自他不二の妙諦に徹してのみ完成せられるのである、佛敎の俱會一處と言ふは即ち此の原理である。慈悲とは一切衆生をよりよく生かすことである、一切衆生を生かさなければ自己の生命すら生かされないのである、萬人のために自己を捧げる時自他の生命は永遠に生かされ、眞の自由と平等と友愛の理想は自他を超越した無我の境地

に於て實在する、有産、無産の階級的意識を超越し、常不輕菩薩の如く萬人の前に、一切の前に臍首合掌し、一枚の紙片、半銭の上にも佛法領のものとして無限の價值を認め、敬虔の至情を凝ぎ、貧欲の所有欲を降いてすべてを佛物として處理してゆく時、地上生活は調和せられて、「自他不二」の理想世界に進むことが出来る。

萬人が平和なる生活をなさんとするのが現今社會問題の基調である、自他の平和幸福を伸ばしてゆく方法は佛教精神の外にはない。自他の共存、自他の成佛は相互が合掌し、他のために自己のすべてを捧げ盡す無蓋の大慈悲心に依つてのみ成就せられる、佛教の根本精神、無我の慈悲心と「自他不二」の觀念を自覺することに依つて行詰れる社會問題は解決することが出来ると吾人は信するものである。(終)

記事

七月京都布教報告

△一日夜本山に於て開講會修行後青年會「還教に就て」土持真進師「初心成佛論」原田日勇師△二日夜本山に於て正會開會「佛教の大綱」原田日勇師△八日川東本正寺に於て二樂會開會「源を混れて」中村英俊師「人生觀」細野長雄閣下△九日正行院に於て正行婦人會開會「佛の誓願」原田日勇師△十日川東本正寺に於て本正婦人會開會「婦人の學ぶべき道」金光孝碩師△全日午後二時より京都立正會前期總會開會、提所川東仁王門道寂光寺に於て「開會宣言」理事長西村吉右衛門氏「御書拜讀」萩原日道台下「會務報告」理事時岡利七氏「會計報告」山科喜七氏「世界的な重要問題と宗教」細野長雄閣下「所感」本禪寺貫首金子日高台下終りて茶話會開會來會者百餘名盛會なりき△十日夜本山に於て青年會開會「思想の中堅」有田安道師「地獄極樂に就て」原田日勇師△十八日夜本山に於て例會「證道の序」有田安道師「日蓮上人の主義」萩原日

讀書餘錄

▲書中で獨り庵室に寝そべつて讀書三昧に耽つた。その中で特に感じたものを一二拾つて述べて見る。

▲永井孝博士の男女兩性の兩立乃至共存に對する隨筆を讀んでゐる中に「婦人問題といふのは男が女かといふ性に關する問題だ。社會問題といふのは男女を通じての階級に關する問題である」といつてゐる明快なる審判である。更に同博士は男女兩關係の情的より經濟に及んで讀んで、何れも透徹せる批判を與へて讀んでゐる自分をしてそれが獎金概念的にもせよ。頗る得る處あらしめた……

▲大連事件で當ての主義者界の領袖を爲した故幸徳秋水の隨筆を讀んで。その中で、愛國革命黨の首領ブレンヂョウカサ女史の生涯を讀してゐるのが特に自分の興味を曳いた。エカテリナアレクシコウカサ女史が六十一年の生涯中廿年間の禁錮、微役配所で暮し、尙「革命の祖母」として働いたその事業と努力を思つては、今日の男子よく愧殺せしめられる處と影くないシヨツクを受けた。

▲社會主義の基本とせられてゐるマックス・スタインネルの英譯「エゴ・アンド・ヒズ・アワン」も讀む機會を得た。萬物は己にとつて無だ」といふエテの句から人間篇、自我篇共にすいぶん骨を刺す自己批判、乃至、社會人の中の自己感、に感心させられた。自分は他日スタインネルについて評論を書いて見たと思つてゐる。

▲古田大次郎の「死の懺悔」を讀して死に直面したものが肉親的愛の熾烈に燃え上るさまを見て、彼も亦人間なりきと、一滴の涙をそいでやる氣になつた。

▲その他まだ二三の讀書感があるが次の機會にする(不明處)

- 道師△廿二日久遠寺に於て講演「興生團結」原田日勇師△廿五日夜より本山に於て一週間納涼大講演會開會す、講師諸題次の如し
- (廿五日) 有田、原田(廿六日) 土持、萩原(廿七日) 今元、原田(廿八日) 坂倉、中島、萩原(廿九日) 豊田、原田(卅日) 伊藤、井上、金光(卅一日) 中村、原田
- 「日蓮上人の主義」原田日勇師「三種の教相」萩原日道師「釋尊出世の本懷」金光孝碩師「佛教文化の特長」有田安道師「世界の統一は佛教統一にある」土持真進師「現代の病弊と信仰」豊田通泰師「現代世相の岐路に立ちて」今井乾章師「日本國と佛教」伊藤真道師「本心と私心」坂倉生壽師
- ### 京都立正統一會 上半期例會報告
- ▲一月 △十六日講演會「丙寅の活動」萩原日道師△廿三日研究會「如來壽量品講義」萩原日道師「佛教の傳來」北澤安兵衛氏
- ▲二月 △三日研究會「如來壽量品講義」萩原日道師△十日講演會「本化利頭の教觀」萩原日道師「佛教の傳來」北澤安兵衛「勤王殿堂の建設」新葉卯三次郎△廿三日午後
- 七日討論會「既成宗教の可否」會員
- ▲三月 三日研究會「如來壽量品講義」萩原日道師△十日講演會「座談」有田安道師△廿一日全「所感」有田安道師
- ▲四月 三日全「實在の信仰」有田安道師△十日研究會「如來壽量品講義」萩原日道師△廿三日研究會「分別功德品講義」萩原日道師
- ▲正月 三日全「隨喜功德品講義」萩原日道師△十日講演會「如來の使者」坂倉西長「廢婦問題に就て」北澤安兵衛「佛教よりみたる政治界」新葉卯三次郎「感想」萩原正美△廿三日研究會「法師功德品講義」萩原日道師
- ▲六月 三日討論會「橫死者の成佛可否」會員△十日研究會「常不輕菩薩品講義」萩原日道師△廿三日研究會「如來神力品講義」萩原日道師(何れも夜間寂光寺にて)
- ### 大阪教報
- 七月一日和井田宅にて「法團冥合」石井氏「日蓮聖人の大恩」京藤布教師△五日蓮成寺にて光好和井田石井三氏出演△十二日堂園寺にて「行學に就て」和井田氏「修行の法軌」上田師△十三日婦人會「信仰の

大事」上田師「闇夜に光を投ぜよ」萩原師△十四日光好宅にて「女子と修養」上田師△十八日丸田宅にて「懺悔に就て」和井田氏「信仰の要義」上田師△二十日徳宅永にて「日蓮主義の特長」石井氏「如来の大慈悲」京藤師△二十二日堂岡寺にて「懺悔に就て」和井田氏「日蓮教徒の使命」石井氏△二十四日平山宅にて「法華經大要」京藤師何れも頗る盛會多大の効果を奏せり、

△金澤教報 ○日蓮主義青年會七月十六日本長寺に開く「宗教研究に就ての方法」能仁一十師○説教二十一日本覺寺に開く「佛陀教説の元意」芝沼謙城師「自己批判」寺島當誓師○説教二十二日本長寺に開く「日蓮上人の宗教」芝沼謙城師「五圓盆の遺徳と其真意義」能仁一十師○正統佛敎講演會二十六日本長寺に開く此日聽衆堂に滿ち極めて盛會「生命の寶塔を凝りて」芝沼謙城師「正統佛敎の基準」能仁一十師○家庭講話七月二十八日本多町河合氏宅にて僅す「涅槃の故郷」能仁一十師○説教二十八日釜屋本城寺に僅す「愛着」寺島當誓師○家庭講話三十日森田氏宅に開く「コンテスされたる信仰」能仁一十師○

入山式 本多町本行寺に新任職松井會攝師を
迎へ七月三日入山式を奉行「新任の所感」松
井會攝師「來る人迎へる者」能仁一十師
△妙教婦人會 名古屋會場寺内妙教

婦人會八月例會を八日夜教化會館に開催、新
愛知新聞記者石原由三郎氏の「調和をとれ」
といふ講演の後三谷布教師の法話あつて全十
時盛會裡に散會

大僧正 本多日生師著

一切の勝利は人格にあり

【第三十五版】發行

發行

名古屋市東區田代町城山
統一編輯局

名古屋放送局の講演——
十部 金五錢 送料金貳錢
十部 金三十五錢 (送料共)
十部 金參圓 (送料共)

振替名古屋一〇八一九

統一團員並各位ニ告グ

今回東京市復興の爲め區劃整理實行に付て我が統一閣も整理移轉する事と相成
目下工事の完成を急ぎつゝ有之候何れ九月一パイには完成の見込に候へば以後
は更らに精進一番邦家の爲めに努力致し度各位も共に共同一致御後援の程熱望
致し居り候

尙統一團主催の日曜講演會は工事完成まで休會いたします何れ完成の曉は統一
誌上と通信を以て御報告申し上げます先は不敢取

九 月

統一閣

東京市淺草區北清島町十四番地

社寺建築 及 臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候
追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候
(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不充分なる檜材は于割狂ひ等の缺陷多きものであります)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福岡支所
(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大阪支所
(電話西三二二四番)

臺灣檜材の六大大特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理整松木
- 六、木高輝色

統一價定

一冊	半冊	一冊	半冊
金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢	金壹圓貳拾錢
送料共	送料共	送料共	送料共
金前	金前	金前	金前

統一廣告料

表紙	一頁	二頁	三頁	四頁
金貳圓	金壹圓	金壹圓	金壹圓	金壹圓
拾錢	拾錢	拾錢	拾錢	拾錢
五	九	四	四	四
事	之	金	前	

大正十五年 八月三十日印刷納本
大正十五年 九月一日發行
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
行(第三百七十八號)

不許複製

編輯所 國友日斌
印刷所 鈴木日斌
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
電話東京五一〇七一番

發行所 統一發行所
名古屋市東區千種町字五反田五二番地
電話名古屋一〇八一九番

編輯局 統一編輯局
名古屋市東區田代町字城山七十七番地
電話名古屋一〇八一九番

目 次

聖訓摘要	大僧正 本多日生
法華修業の安心	本多日生
秋窓異學瑣談	古田昂生
理想の文化と佛教	本多日生
日蓮聖人(童話讀本)	長谷川義一
各地通信報導	編輯局

第三十三一十年十月號

統 一